

〔論 文〕

# ベトナム系仏語表現作家キム・チュイにみる 難民の語りと脱周縁的創造力

真 田 桂 子

## はじめに

今日、フランス語圏の諸地域において、移民やディアスポラを始めとして、様々な事情によって祖国を離れ創作する作家が目覚ましい活躍を見せている。ベトナム難民としてカナダのケベック州に移住し、フランス語で活発な創作活動を行っているキム・チュイ (Kim Thúy) もまぎれもなくその一人に数えられるであろう。

チュイは、1978年、10歳の時に戦禍のベトナムを離れ、ボートピープルとしてカナダに渡りケベック州のモントリオール市郊外の町グランビーに受け入れられて移住する。モントリオール大学で文学と法学を学び、通訳、弁護士、レストランのオーナーなど、様々な職種を経て、2009年に難民の体験と移住したケベックでの生活を描いた小説 *Ru* (邦訳『小川』)<sup>1)</sup> によって作家として彗星のようにデビューする。注目すべきことは、この小説は出版されたカナダ国内に先んじて、フランスをはじめとする欧州において反響があり、2010年にはフランスのRTL-Lire 文学賞を受賞するなどの高い評価を受ける。その後カナダ総督文学賞 (フランス語部門) も受賞し、現在まで世界各地の二十数か国で翻訳、出版されている。このように、チュイはケベックを拠点としながらも、フランスをはじめフランス語圏全般に知られる作家としてこれまでに三つの小説と一つのエッセイを発表し現在に至っている<sup>2)</sup>。

本論考では、それまでのケベックへの移民作家と比較して、キム・チュイの作品がケベックだけにとどまらず早々と世界的に幅広い反響を勝ち得たことに注目し、旧世代移民作家との共通点と違いを浮き彫りにしながら、デビュー作『小川』を中心とする難民の語りについて分析したい。そして今日のフランス語圏文学全般の状況も視野に入れながら、キム・チュイの作品が内包する文学的創造力の独自性について考察する。

## I 『小川』における難民の語り

### 1. 作家の誕生と『小川』の成立

キム・チュイのデビュー作 *Ru* は、フランス語で「小川」を意味し、比喩的に「(涙、血、金銭などの)流れ」を指し、ベトナム語では「子守唄」「揺籠」を意味するという<sup>3)</sup>。すでに述べたように作者のキム・チュイは、1970年代、10歳になった頃、戦禍のベトナムを離れボートピープルとしてケベックに移住しており、『小川』はその体験を描いた自伝的な小説である。

「(爆竹の)花火と光の輪で彩られた空を、ロケット弾や銃弾が横切る」<sup>4)</sup> なかで生まれたという主人公の述懐で始まる物語は、重く切実なベトナムの歴史を背負っている。1960年に勃発したベトナム戦争は、米ソの対立を背景に、共産主義陣営であるホー・チ・ミン率いるベトナム民主共和国 (北ベトナム) とアメリカの支援を受けた資本主義陣営のベトナム共和国 (南ベトナム) との泥沼の戦いに発展してい

た。このベトナム戦争の最中、南ベトナムにあるサイゴン（現在のホーチミン市）の裕福な家庭に生まれたチュイとその家族は、北ベトナムの脅威にさらされ、サイゴンが陥落しベトナムが社会主義体制に移行したため、チュイが10歳になった頃ボートピープルとして国外に亡命する。チュイが乗ったボートが向かったのは、その多くが向かうアジア諸国の一つ、マレーシアの難民収容所であった。それはまさに命がけの脱出であった。しかし、こうしてたどり着いたマレーシア難民キャンプでの生活は、二百人しか収容できないところに二千人も難民がひしめく不衛生で悲惨極まりないものであり、その後何か月かを経てチュイとその家族はケベックに難民として受け入れられ、ようやく安住の地を得ることになる。

この小説はこのような幼い頃の過酷な体験と変遷を経て、作者がケベックに移住して30年余りを経てから書かれている。チュイはケベックの大学で文学と法学を学び、卒業後、縫い子や事務員、翻訳者、弁護士となり、レストラン経営も行うなど実に多彩な経歴を経ており、その後ふとしたきっかけで執筆したこの作品が友人の目に留まり、出版する運びとなったという。

## 2. 『小川』における戦火の祖国

この小説を読むものはまず、作者の稀有で過酷な体験の数々に胸を打たれるだろう。この作品の魅力は、成人し、たとえ数十年を経たのちにでも、歴史に翻弄され、痛痒をもってしか思い起こすことのできない故郷の情景や人々の生活、とりわけ大家族をなすベトナムの一族の姿、戦火のなかで名もなく消えていった人々など、幼い頃に体験し見聞きした出来事の数々が、作者の深奥に刻み付けられ、決して消えることなく、鮮やかに浮かび上がってくることにあるだろう。それらはむしろ追憶のなかで研ぎ澄まされ浄化され、悲惨すら詩（ポエジー）に転嫁する繊細でしなやかな文体によって甦えるのである。

キム・チュイの正式の名はベトナム語で「平和な心情」、母の名は「平和な環境」<sup>5)</sup>を意味するというが、ベトナムの歴史は人々の運命を大きく狂わせる。実質的にアメリカの敗北によって終結したベトナム戦争の後、アメリカ寄りであったベトナム南部の富裕層に属する人々は、共産主義勢力の追っ手を逃れて次々に祖国から脱出する。共産党員から睨まれたエリート層のあるベトナム人外科医は切迫した命の危険を感じとり、自らが思想矯正キャンプへと送りこまれる前に、5人の子供を別々のボートに乗せて脱出させた。たとえ海に呑まれる危険があったとしてもそれしか救う道はなかったのである。そしてチュイの一家もボートピープルとして脱出する。

(…) 船底では昼と夜の区別がなく、小さなボートの周りにはるかに続いている海と空から私たちが守ってくれるのは、このわずかな電球の灯りだけだった。船の底では海の青さと空の青さの区別がつかず、天国と地獄が絡み合っていた<sup>6)</sup>。

共産主義者だけでなく、海賊の襲来にも怯えながらの命がけの脱出の果てに、一家は難民キャンプのあるマレーシアへとたどり着く。しかしそこで待ち受けていたのは、ベトナムで何不自由のない生活を送っていた頃には想像もできないような、二千人もの人々がひしめき合い、赤い土の上に直に寝泊りするような生活だった。

(…) 赤十字はベトナムの隣国にボートピープルを受け入れるための難民キャンプを開設した。ここまでたどり着けなかった人たちは、脱出のさなかに海に落ち、「ボートピープル」にすらなれず、名もなく死んでいった。私は硬い土の上にじかに横たわることができたのだ。(…) 難民の一人になるといふ神の祝福を受けたのだ<sup>7)</sup>。

Mar. 2017 ベトナム系仏語表現作家キム・チュイにみる難民の語りと脱周縁的創造力

難民キャンプでの生活は、悲惨と救い、絶望と希望が混在し分かちがたく絡み合ったような生活であった。難民キャンプに健康診断に訪れたカナダ政府の医師は、チュイら子供たちに性別を尋ねることもせず、いきなりズボンのゴムを下げて性別を確認した。それくらい難民の子供たちは痩せこけていて、10歳の男の子か女の子かの区別もつかなかった。一方、ウジ虫が湧き糞尿で一杯になった浄化槽のすぐそばで、食料配給の時間に配られる、傷ついて匂いのする魚を食べながらようやく生きながらえていたとしても、これからの生活に必要なとされる英語を子供たちに教えてくれるボランティアの若者の屈託のない笑顔に、現在の息詰まるような生活の向こうに夢を抱くことができる地平があることを感じることができた。

### 3. 『小川』と安息の地ケベック

命がけの脱出と数か月にわたる難民キャンプでの苛酷な生活を経て、チュイの一家は鬱蒼とした熱帯の森に囲まれたマレーシアのキャンプから、純白の大地が広がるカナダのケベック州へとやって来る。モントリオール郊外のグランビーという小さな町に難民として受け入れられ、そこで過ごした一年はあたかも「地上の楽園」であるかのように感じられたという。極寒の地でありながら、人々の温かさが傷ついた心と体を癒やすのだった。初めて出会ったカナダ人の先生は、あたかも大地への接ぎ木を促すように、新しい土地に難民の子らが馴染めるように気を配ってくれた。受け入れの地を象徴するかのようになり、マリ＝フランスという名の先生は包容力に溢れた人柄と丸みを帯びた体つきで、子供たちを包み込んでくれた。

(…) 彼女のように豊満で丸みを帯びた体から、寛大さや暢気さを発散している者は私たちのなかには誰一人いなかった。私たちベトナム人は皆、角張ってごつごつとしたからだしか持ち合わせていなかった<sup>8)</sup>。

グランビーの町の人々は、それぞれにキムらを温かく迎えてくれた。小学生の難民の生徒たちを、家庭のお昼ご飯に招待してくれた。たとえそこで出されたポロポロとこぼれるライスが、ベトナムでのそれとあまりに違っていたため、どうやってフォークで食べればいいのか分からず戸惑うだけであったとしても、言葉では表し切れない感謝の気持ちで一杯になった。

### 4. 交錯する記憶と断片のコラージュ

こうして安息の地を得て新しい人生を歩み出したとはいえ、逃れてきた祖国の情景は決して消えることなく、チュイの深奥に淀み続ける。そして時折、ふとしたきっかけで意識の表面に浮かび上がってくるのであった。ある日、グランビーの学校の校外学習の折、昆虫採集に出かけた沼地でたまたま耳にした虫の鳴き声は、マレーシアのキャンプの例えようもなく劣悪な便所小屋で聞いていた虫たちの歌を彷彿とさせた。

(…) 目を閉じると、その時聞いていた虫たちの鳴き声がたちまち甦ってきた。何か月もの間、マレーシアの照りつける太陽のもとで、糞尿が詰まった穴の上で用を足すたびに、その鳴き声を聞いていたのだから<sup>9)</sup>。

ケベックでの平穏な日常に、白昼夢のようなベトナムやマレーシアでの情景や、人々の姿が浮かび上がり炸裂する。この小説の文体は、記憶の断面がコラージュのようにつなぎ合わされ、ほとんどが1

ページに収められた短い章で組み立てられている。しかし、そこに描かれる世界は一つ一つが固有のもので、凝集され濃密で、あたかも熟れた果実をほおばったときのように独特の芳香と余韻を残す。そしてベトナムやマレーシアの情景とケベックのそれとは、チュイの心の襞の奥深くで交錯し合い、新たな意味や輝きを放って甦るのである。

このようなチュイの難民体験から紡ぎ出された小説は、ケベックにとどまらず、フランスをはじめとしたフランス語圏で早々と評価され世界各地で翻訳され広まった。このように受容されたチュイの作品の真価とはどこにあるのか。次に、チュイの作品が内包する独自性についてそのいくつかの要因を明らかにしながら、それまでのケベックの移民作家との比較的考察や変貌するフランス語圏文学の現状も踏まえながら検証したい。

## II キム・チュイにおける脱周縁的創造力

### 1. 旧世代移民作家との比較的考察から

すでに述べたように、チュイのデビュー作の『小川』は2009年にケベックで出版されたが、翌年フランスでRTL-Lire 文学賞を受賞する。この小説はフランスのメディアから「恐怖の体験を語る簡潔できらめくような断章の数々から(…)稀有な幸福感が立ち上る小説」<sup>10)</sup>と評された。このようにケベックにおいてよりも、いち早くフランスで反響を得て高い評価を得たことは注目に値する。

これまでにケベックに移住してフランス語で表現活動を行っているアジア系の女性作家としては、中国系のイン・チェン (Ying Chen, 1960-) や日系のアキ・シマザキ (Aki Shimazaki, 1954-) があげられるであろう。チェンやシマザキはしばしば、1980年代から90年代にかけてケベック文学に大きな影響を与えた「移動文学 (l'écriture migrante)」の動向において注目されてきた。チェンもシマザキもその作品はまずケベックで評価され、主にケベック文学の枠組みや文脈のなかで批評され、その後フランスをはじめとするフランス語圏諸国にも紹介されていった<sup>11)</sup>。

この二人のアジア系女性作家とチュイとの大きな差異とは何よりも、それぞれのケベックに移住した年齢と状況の違いにあるだろう。イン・チェンにしても、アキ・シマザキにしても、両者は成人してから自らの意志によってケベックへ移民として移住することを選択した。チェンもシマザキも、それぞれにスタンスの違いはあるものの祖国に対しては批判的な立場をとっており、一方でフランス語と受け入れの地ケベックは自ら選び取ったとはいえ、容易に順応し難い側面があることを証言している。そしてチェンにあってもシマザキにあっても、いわゆる「移動文学」の作家の多くがそうであったように、祖国と移住先との間で揺れ動き、どこにも帰属しえない違和感を作品に昇華させながら、独自の文学世界を切り拓いてきたといえるだろう。一方、チュイの場合は、成人にはほど遠いまだ10歳という未成年の頃に、親族とともに難民として移住する。それは自分自身の選択においてではなくやむをえない事情においてであった。それまでのベトナムの生活で培われた子供時代は十分に意識され自我のなかに根付いてはいたが、そののちのケベックへの移住と成長の年月もチュイの人格の形成に大きな影響を及ぼしていくものであった。チュイの半生はいわば、二つの祖国と文化が接ぎ木されたものであったと言えるだろう。従って、チュイにあってはベトナムとケベック、ベトナム語とフランス語の二つの祖国と言語は対立し合うものであるより、互いに刺激し合い補完し合うものであった。そしてそこにこそ、チュイの文学の一つの大きな源泉があると考えられる。

### 2. 言語の補完的關係性

チュイはインタビューにおいて複数の言語の關係について述べている<sup>12)</sup>。まずフランス語に対して



Mar. 2017 ベトナム系仏語表現作家キム・チュイにみる難民の語りと脱周縁的創造力

は、10歳の頃からケベックで生活しフランス語で教育を受けたとはいえ、自分にとってフランス語とは今でも自由自在にあやつれるものではなく、違和感を抱かずにはいられない言語であると述べている。しかしその一方で、多くの「発見」に満ちた言語であるという。また、チュイにとってのベトナム語は幼年の言葉であり、基本的な感覚を言い表す言葉であるが、思春期から成人に至るまでの間にケベックで習得したフランス語は何よりも思索の言語であり、複雑な感情を表す言語であると述べている。一方、ベトナム語には独特の音楽性が宿っており、フランス語を使うときにそれを取り入れることもあると言う。他方、フランス語にはベトナム語では表せない官能性が備わっており、ベトナム語にはない表現の自由の可能性を感じるという。チュイはまたケベックで英語も習得する機会を得ており、英語にもかなり堪能である。実際、弁護士として活躍していた時代には主に英語を使っていたという。そのため、英語はチュイにとって何よりもロジック（論理）を表す言語であるという。このように、三つの言語を内面化しながら、それらの及ぼす相互作用を積極的に創作活動に結びつけていると述べている。とりわけ、ベトナム語とフランス語との意味や音の違い、あるいは生活習慣の違いが引き起こす差異やズレが、時として深甚な思索へと扉をひらくきっかけとなるのである。

（ベトナムでは）愛は心にはではなく頭に起因することを、私は忘れていた。体のなかで頭だけがとりわけ大事にされた。ベトナム人を侮辱するなら、頭を触るだけで十分だった。（…）だから、ある内気な8歳のベトナム人の少年がサッカーの試合で始めてゴールを決めたとき、ケベコワのチームメイトがそれを祝って彼の頭をさわったとき、そのベトナム人の少年は烈火のごとく怒りだしたのだ。

愛情の証しとみなされるしぐさが、時に侮辱を意味することになるのなら、愛情表現は世界共通ではないということだ。言語のように翻訳され、学んでいく必要があるだろう。ベトナム語では「愛情」を言い表すためのニュアンスに富んだいくつもの言葉があり、分類し区別して表現することができる。（…）愛を伴わない好意、熱烈な愛情、盲目的な愛情、感謝による愛情。だから理性を伴わずに愛を語ることはベトナム語では不可能なのである<sup>13)</sup>。

すでに言及したように、この小説のタイトルである *Ru*『小川』（邦題）のベトナム語とフランス語のそれぞれの意味については小説の序文で著者自身が解説している。タイトルに象徴されるように、この小説はいわば、ベトナムとケベックの二つの言語と世界観が重層的に絡み合っただけで構築されていると言えよう。このように作家が目指すものとは、フランス語とベトナム語、ケベック（あるいはフランス）とベトナムが互いに触媒として作用し合い、生み出される新しい地平に他ならないのではないだろうか。

### 3. 解き放たれる祖国の人々の情景

チュイの作品におけるもう一つの大きな特徴は、苛酷な運命に翻弄された祖国ベトナムの無辜の人々への強い愛着である。劣悪な環境と不条理のなかで、数奇な運命をたどり命を落とした名もなき人々の姿が、静かな怒りをもって描かれる。

（…）ナマズでいっぱいの池の上に設置されたトイレに足を取られて亡くなった女性がいた。プラスチックのサンダルが滑ったのだ。（…）彼女は悪臭のする穴の中で死んだ。彼女は二枚のベニヤ板の間の、（…）鱗のない、つるりとした肌の、鮮やかな黄色のナマズに囲まれ、だれの記憶に残ることなく死んだ<sup>14)</sup>。

一方、一族の一人、ベトナムでは裁判官までつとめたアンおじさんは、共産主義者に捕えられ過酷な

再教育のためのキャンプ場で、拳銃をこめかみに当てられ、迫りくる恐怖のなかで見上げた空で、はじめて空の青さが美しい陰影に富んでいることに気付く。

彼は生き残った。(…)他の仲間たちは、空の青さの濃淡を数えることなく、窒息死したり、飢え死するなどした。彼は、その後、仲間たちのために、毎日、空の青さの陰影を記すことを日課としていた<sup>15)</sup>。

このように、極限の状態のなかで精神の均衡すら失いながら、澄んだ哀しみとともに生き延びる人々の姿が浮き彫りにされるのである。

さらに、とりわけチュイが強い共感をもって描き出すのは、運命に翻弄され声を上げることもできず、ベトナムの苦難を背負い歴史の波間に消えていった女たちである。

武器や銃を身にまとって戦った夫や息子たちの傍らで、ベトナムの歴史を一身に背負った女たちがいたことはすっかり忘れ去られている。彼女らが忘れ去られたわけは、女たちがかぶり傘の下から決して顔を上げようとしなかったからだ。女たちは沈む陽のまばゆさに幻惑されることを望んだが、陽が沈み睡魔に襲われることは恐れた。もし眠りこけてしまえば、息子たちの体が粉々にされ、夫の死体が川面を漂っている情景を想像してしまうからである。アメリカの黒人奴隷なら、綿花畑でその苦しみを唄に託して歌い上げることもできただろう。しかしベトナムの女たちは、ただ心のうちにその悲しみを閉じ込め、膨らむがままにしておくことしかできなかった。こうして女たちは、苦しみの重みで体がたわみ、二度と曲がった腰を伸ばすことができなくなってしまった。男たちがジャングルから帰還して、村のあぜ道を再び歩き出した後も、女たちはその背に押し殺されたベトナムの歴史を背負い続け、しばしばその重みに耐えかね、沈黙のうちに死んでいった<sup>16)</sup>。

このようにチュイは、独自の比喩のうちに溢れ出る共感を込めて、歴史の重みに押しつぶされた哀切な女たちの姿を浮き彫りにするのである。「背の曲がった老婆」のイメージはこの後も繰り返し作品のなかに現れる。一方、ベトナムの苦難を引き受けて生きたのは何も年老いた女たちだけではないのである。ケベックに受け入れられ、そこで成人し「ベトナム系カナダ人」として安定した生活を手に入れたチュイは、仕事で世界各地を訪れ、ポートビープルとして脱出した祖国ベトナムに滞在する機会を得る。そこで目にするようになったのは、先進国の男たちに金で買われ搾取されるベトナムの若い女たちの姿であった。

(ベトナムの)若い女たちが、足元に投げ捨てられ散らばったドル紙幣を拾う光景を見てから、自分自身が若いもてはやされていていい気持ちになることなどなくなった。そして若い女たちを思いやり心から同情した。その若い女たちは、これまでの人生の奥底に、その体の奥深くに、背の曲がった老婆と同様、言い知れぬ思いを、ベトナムの歴史の重みを抱えているのだ<sup>17)</sup>。

チュイは、この地上で同時代を生きながら、先進国と発展途上国のそれぞれの若い女性たちの間には、あまりに大きな隔たりが存在していることに愕然とする。そして両者の違いを、体の傷と心の傷という対照的なメタファーを用いて鋭く問いかける。

モントリオールで、わざと肌に消せないタトゥーを入れている少女たちに出会うと、ひそかにこの世

Mar. 2017 ベトナム系仏語表現作家キム・チュイにみる難民の語りと脱周縁的創造力

で別の種類の傷を背負って生きている少女たちがいることを知ってほしいと願わずにはいられない。彼女らの傷はあまりに深いところにあり目に見えない。両方の傷を比べてみたらいいだろう。自ら望んでつけた傷と負わされた傷、一方は金を払ってつけた傷で、もう一方の傷には金が支払われている。一方は目に見えて肌の表面を飾り、もう一方は目に見えず肌の奥深くに隠れている<sup>18)</sup>。

このようにベトナムの「背の曲がった老婆」も「目に見えない傷を負った若い女たち」もチュイの意識のなかに消えることなく焼き付いている。ケベックに難民として受け入れられ、カナダのパスポートを持つ立場となった後も、作家は接ぎ木された二つの世界を行き来しながら生き続けるのである。

しかしチュイは、ベトナムの人々の悲慘と哀しみを嘆き、それだけを描こうとしているわけではない。一方で、祖国の悲慘をくぐりぬけ、新天地に降り立ってたくましく人生を切り拓いていこうとしたベトナム人の一族の姿が描かれる。ポートピープルとして海を渡り、アメリカやカナダに移住したチュイの親族が、85歳になった祖母の誕生日を祝うため、ある日ニューヨークの郊外に一同に会する。なかには、従妹のサオ・マイのように、ベトナムに帰り事業で大成功を収めたものもいたが、大部分は新しい移住先でベトナムでの地位と職業を捨てざるをえなかった。チュイの父母も、移住先のケベックでは社会的に低い地位の職業に甘んじなければならなかった。祖国では何人もの使用人を従え裕福な生活を送っていたチュイの母は、戦火のベトナムですべてを失い、ケベックでは家政婦となって働いた。

母はよく次のようなベトナムの諺を口にした。「人生とは戦いである。そこでは悲しみにうちひしがれば敗北が待っている。」(…) そうして母は、悲しむことなく戦いに挑んだ。母は34歳にして初めて働きに出たのだ。最初は家政婦として。そして工場の労働者や、お針子やレストランの給仕係として働き始めた<sup>19)</sup>。

難民にせよ、移民にせよ、先進国へと移住を果たした第一世代が、その地で生き延びるために社会的な地位を捨てざるをえないことはよく知られた事実であり、文学にも繰り返し描かれてきた。第一世代の親はある意味で犠牲になって、第二世代の子供のために身を挺して働くのである<sup>20)</sup>。チュイの場合も同様であり、そのような状況を痛いほど自覚していた。小説の冒頭にあるように、作家は「私の人生の使命とは、母の失われた人生を取り返し、その人生を引き継ぐことにあった」<sup>21)</sup>と述懐する。さらにチュイは、犠牲となった父母の世代の生き方を決して後ろ向きにとらえるのではなく、むしろそこに前向きな価値を見出そうとするのである。

両親はしばしば、私たち子供に何の財産も残してはやれないと言うけれど、私は彼らからとても豊かな財産を受け継いだと思っている。自然の美しさや、言葉の繊細さを感知する力を、そして様々なことに感動する力を。そして何より、どこまでも夢に向かって自分の足で歩いていける力を。私たちが自分自身で生きていくために、荷物はそれだけで十分ではないだろうか。そうでなければ、私たちは持ち運ばなければならないものや守らなければならないもののために、かえって足をとられてしまうだけだろう<sup>22)</sup>。

この省察はある意味で、物欲にとらわれた現代社会への鋭い批判となっている。このようにチュイの小説は、それまで人々の意識のなかにのぼることすらなく周縁に追いやられていた祖国ベトナムの人々の風景を、研ぎ澄まされた感受性と創造力によって甦らせ力強く描き出す。そして新天地でたくましく道を切り拓こうとした難民の人生に新たな意味を見出し、再生させようとするのである。そのことはま

た、カナダやフランスなどの移住先の世界に、それまで周縁とみなされていた地域からの新たな価値観をもたらし、「中心」と「周縁」が混じり合った新しい世界観を構築することに他ならないと思われる。そしてここにこそ、チュイの文学の「脱周縁的」な創造力があるといえるだろう<sup>23)</sup>。

### Ⅲ 脱周縁的創造力とフランス語圏文学の可能性

1980年代から90年代にかけて、「移動文学 (l'écriture migrante)」と呼ばれる潮流において活躍した旧世代のアジア系女性作家とキム・チュイとの大きな違いとは、世代的な違いというより、成年になって自らの意思において移住したチェンやシマザキのスタンスと、子供の頃に移住を余儀なくされた難民としての立場の違いに起因すると考えられる。

中国系のチェンや日系のシマザキは、いずれもケベックに移住してフランス語で創作活動を行い、その作品のうちにそれぞれの祖国を取り上げて描いている。両者の作品において描かれる祖国は、読者にある種のエグゾチスム (異国情緒) を喚起する文学的価値を伴いながらも、しばしば批判的に取り上げられるか、ケベックという受け入れの地を相対化するためのもう一つの極として描かれた。それぞれの文体に大きな違いはあっても、チェンもシマザキも、祖国にも受け入れの地ケベックにも完全には同化せず、二つの世界の狭間を揺れ動きながら、その文学において、いずれの世界にも属することができない「不可能性」のうちに独自の地平を切り拓こうとした。そしてそこにこそ、いわゆる「移動文学」の作家たちに共通する美学があったと言えるだろう。

一方、チュイにおいては、10歳というまだ子供の頃にケベックに受け入れられた状況は、祖国ベトナムと移住の地ケベックの双方に愛着を持ち、二つの世界を補完的に受け入れることが可能になったと思われる。実際、作家は、自らがベトナムとカナダという二つの世界を生きる折衷的な存在であるという事実を強く意識するのである。

シュルブルック大学に従妹を送っていった帰りに立ち寄ったガソリンスタンドで、一人のベトナム人が、私の腕に残った (ベトナム特有の) ワクチン接種の痕を見て近づいてきた (…。) この傷跡を一目見るやいなや、雪に覆われたこの土地に移植された、私たちに共通する熱帯の根っこを見出したのだ。即座に私たちは、互いの両義性と雑種性を理解した。半分はここにあり、もう半分はあちらにあり、どちらでもなく、同時にどちらでもあった<sup>24)</sup>。

このように、おそらくチュイの文学の魅力とは、たとえ二つの世界を生きる葛藤や矛盾があったとしても、それらをおおらかに受け入れて乗り越えながら、その過程において新たな世界観を再構築していくこととする肯定感に満ちたダイナミズムにあるだろう。事実、フランスにおいて、チュイの作品は「(…) 様々に入り組んだ内省に富みながら、生きることへの渴望と楽観的な意志に貫かれている」<sup>25)</sup>、あるいはチュイは「その創作を通して「生き残る」ことから出発して「人生を愛し謳歌せん」としている」<sup>26)</sup>と評された。

一方で、フランスでチュイの作品がいち早く評価された背景には、フランスにおけるフランス語圏文学への関心の高まりがあるだろう。フランスでは一般に、フランス文学の長い伝統に則った規範的な文学が評価されてきた。しかし今日、これまでのフランス文学は行き過ぎた観念主義の壁に突き当たり大きな閉塞感を抱えていると言えるだろう。そのようななかで、フランスの旧植民地である北アフリカ、マグレブ諸国からの移民や海外県であるカリブ海地域出身者など、いわば「周縁」からの作家たちが躍進し大きな注目を浴びるようになった<sup>27)</sup>。2013年のケベックを中心に活躍するハイチ系の作家ダニー・ラ



Mar. 2017 ベトナム系仏語表現作家キム・チュイにみる難民の語りと脱周縁的創造力

フェリエール (Dany Laferrière, 1953-) のアカデミー・フランセーズ入りは、フランス語圏文学への関心の高まりとフランス文学再編の動きを象徴的に表しているだろう。

そうした状況において、チュイは、難民としての体験を脱周縁的で普遍的なものとして人々に訴えかけようとする。「(…)あなた方の唇に私の言葉が滑り込むその瞬間まで、私やその前を生きた人々の痕跡を刻みつける、(…)白昼夢のような彼らの痕跡を(…)」<sup>28)</sup> という作家の声に耳を傾けると、世界の二十数か国もの諸地域で翻訳されたというこの作品の真価とは、運命に翻弄され苦しみ消えていった名もなき人々への深い共感に裏打ちされた、表現者としての強い使命感と矜持のなかにこそあるように思われる。

### 〈付 記〉

この論考は、平成28年度の科学研究費補助金基盤研究C (課題番号26370376:「ケベック・ベルギー・スイスの仏語圏文学にみる脱周縁性とトランスナショナルな変容」)を受けての研究成果の一つである。

### 注

1) Kim Thúy, *Ru*, Editions Libre Expression, 2009, Montréal

この作品からの引用はすべて筆者自身が行う。なお邦訳としては、『小川』キム・チュイ、山出裕子訳、彩流社、2012年がある。また、キム・チュイとケベックのアジア系女性作家を扱った論文としてはすでに、「ケベックのアジア系女性作家と「間文化主義」:キム・チュイの作品を中心に」(山出裕子、『ケベック研究』第5号, p.83-96, 2013年, 日本ケベック学会)がある。本論文でも共通する作家を取り上げるが、ケベックだけの文脈においてではなく、フランスを中心とするフランス語圏文学における受容という全く異なった観点から分析し考察を行っている。またキム・チュイの『小川』については、筆者自身が書評(真田桂子、『ケベック研究』第5号, p.191-193, 2013年, 日本ケベック学会)を書いているが、本論文中の表現と内容が書評におけるものと一部重複していることをお断りしておく。しかし、ここでは論文として作品を詳細に分析し様々な文献を引用して論述しており、全体としては全く異なった内容となっている。

2) Kim Thúy がこれまでに発表した作品のタイトルは、下記の主要参考文献を参照。

3) Kim Thúy, *Op.cit.*, p.7. タイトルのベトナム語とフランス語の語源的説明は、この小説のプロローグ(序文)として記されている。

4) *Ibid.*, p.11.

5) *Ibid.*, p.12.

6) *Ibid.*, p.13.

7) *Ibid.*, p.24.

8) *Ibid.*, p.19.

9) *Ibid.*, p.36.

10) <http://www.lefigaro.fr/livres/2010/01/21/03005-20100121ARTFIG00543-jeunes-pousses-.php>

11) 「移動文学 (l'écriture migrante)」(あるいは「移動のエクリチュール」)については拙著『トランスカルチュラルリズムと移動文学-多元社会ケベックの移民と文学』(彩流社, 2006年)を参照。とりわけここで取り上げたアジア系女性作家については、第一部第4章「アジア系女性作家と反逆の魂-イン・チェンとアキ・シマザキ-」で詳しく論じている。

12) キム・チュイ氏は、2016年10月に日本ケベック学会全国大会のゲストスピーカーとして招かれ来日した。筆者は同年10月8日に明治大学においてキム・チュイ氏に創作活動についてインタビューを行っている。本論考でのチュイ氏の言及は大部分がこのインタビューからの引用である。チュイ氏はまた、自らの創作活動について積極的に様々なメディアからのインタビューに答えている。

13) Kim Thúy, *Op.cit.*, p.104.

14) *Ibid.*, p.48.

15) *Ibid.*, p.95-96.

16) *Ibid.*, p.47-48.

- 17) *Ibid.*, p.131.  
 18) *Ibid.*, p.132.  
 19) *Ibid.*, p.22-23.  
 20) 例えば, Marco Micone は, 下記の記事でチュイの作品において移民の第一世代(親世代)の状況が一つの重要なテーマとして取り上げられていると指摘している。  
 Marco Micone, Culture d' accueil et culture immigrées – Insufflons un peu d' âme au débat, *Le Devoir*, Idées, 23/02/2010  
 21) *Op.cit.*, p.11.  
 22) *Ibid.*, p.50.  
 23) 言うまでもなく, ここで述べている「中心」と「周縁」の区別はあくまで相対的, 便宜的なもので, 何をもって「中心」あるいは「周縁」と言うかは必ずしも明確ではないだろう。また, こうした二元的な区別が常に説得的だとは言えないであろう。しかし, 下記の D. コンブの著作でも触れられているように, これまでパリやフランスでの価値観が絶対的な中心とみなされていた状況が変化しつつあり, そうした状況にある今日のフランス語圏文学を考察する上で, 一定の説得力は持ち得ると思われる。  
 24) *Op.cit.*, p.137.  
 25) La Cité crée son prix, *Homme et migrations*, no 1284, 2010, p174-179.  
 26) Biographie de Kim THUY, par PhilBON, 21/07/2011  
<http://eveve.lefigaro.fr/celebre/biographie/kim-thuy-43483.php>  
 このコラムにおいても, チュイの作品がケベックで発表されながら, ほどなくフランスをはじめ欧州で反響を得たことに注目している。  
 27) Dominique Combe, *Les littératures francophones, Questions, débats, polémiques*, PUF, 2010, p.217-223. D. コンブはフランス語圏文学についての著書で, 規範的なフランス文学が勢いを失いつつあり, いわゆる「周縁」からの作家を受け入れながら再編の道を歩んでいると論じている。  
 28) Kim Thuy, *Op.cit.*, p.144.

#### 〈主要参考文献〉

- Combe, Dominique, *Les littératures francophones, Questions, débats, polémiques*, PUF, Paris, 2010  
*Homme et migrations, Revue française de référence sur les dynamiques migratoires*  
 (<http://hommesmigrations.revues.org/>)  
 Klinkenberg, M.Jean-Marie, *La langue et citoyen*, PUF, Paris, 2001  
 Le Bris, Michel, Rouaud Jean, *Pour une littérature-monde*, Gallimard, Paris, 2007  
*Le Devoir* (<http://www.ledevoir.com/>)  
*Le Figaro littéraire* (<http://eveve.lefigaro.fr/>)  
*Le Figaro Magazine* (<http://www.lefigaro.fr/livres/>)  
*La Presse* (<http://www.lapresse.ca/>)  
 Thuy, Kim, *Ru*, Editions Libre Expression, Montreal, 2009  
 ———— *Ru*, Editions Liana Levi, Paris, 2010  
 ———— *À Toi (avec Pascal Janovjak)*, Editions Liana Levi, Paris, 2011  
 ———— *Mân*, Editions Liana Levi, Paris, 2013  
 ———— *Vi*, Editions Liana Levi, Paris, 2016  
 真田桂子, 『トランスカルチュラルリズムと移動文学—多元社会ケベックの移民と文学』, p.298. 彩流社, 2006年  
 ———— 「書評 キム・チュイ著『小川』」, 『ケベック研究』第5号, p.191-193. 日本ケベック学会, 2013年  
 ———— 「ケベックの「移動文学」の浸透と波及—『フランス移動文学作家事典1981-2011』の刊行をめぐって—」, 『阪南論集. 人文・自然科学編』49巻2号, p.81-93. 阪南大学学会, 2014年3月  
 (<http://id.nii.ac.jp/1104/00000461/>)  
 チュイ・キム, 山出裕子訳, 『小川』, 彩流社, 2012年  
 山出裕子, 「ケベックのアジア系女性文学と「間文化主義」: キム・チュイの作品を中心に」, 『ケベック研究』第5号, p.83-96. 日本ケベック学会, 2013年

(2016年11月18日掲載決定)